

# 留学生のレジリエンスの現状と レジリエンスを向上させるための支援の在り方の検討

河野 和美\*, 石田 京子\*\*

## 要約

2020年度よりA短期大介護福祉学科として、初めて留学生の受け入れを開始した。留学生は生活を成り立たせるためのアルバイトと、介護福祉士教育という専門教育の中で様々な試練を抱えている。留学生の自己効力感や自己統制力に関するエゴ・レジリエンスはかなり高いことが分かった。データ分析より、レジリエンスを向上させるサポートとして「自己効力感の自覚」、「自己統制力の発揮」、家族や友人からの「情緒・所属的サポートの受領」があった。レジリエンスを低下させると考えられる主なサポート不足には、「日本語習得へのサポート」であり、その中でも1年次は、話し言葉としての日本語の修得、2年次は書き言葉としての日本語習得へのサポートが不足しており、そのサポートの要請も多く出されていた。また、「評価的サポートの受領」が全く見られなかったことから、留学生の頑張りを教員集団が充分評価し、レジリエンスを高める必要性が示唆された。

キーワード：レジリエンス、留学生、生活支援、教育的支援、介護福祉

2021年9月30日受理

## I. 緒言

介護業界の人手不足が深刻化していく中で、介護福祉士の養成については、国家的な喫緊の課題となっている。現在、日本人介護福祉の減少とは逆に平成29年(2017年)9月1日から在留資格「介護」が創設されたことにより、外国人留学生の入学が増加しており、A短期大学でも2020年より留学生の入学を許可している。介護福祉士養成校(2年以上)を卒業し、介護福祉士国家資格を修得後、介護業務に従事することで在留資格を修得でき、日本に永続的に滞在が可能となった。現在9名の留学生(ネパール5名・フィリピン4名)が卒業、介護福祉士国家資格を修得するために、学業に励んでいる。

しかし、介護福祉士国家試験の留学生合格率は、日本介護福祉士養成施設協会の調べによると35.9%

(令和元年度)と大変低く6割以上の留学生が国家試験に合格できていない状況である。外国人留学生の国家試験合格率を上げるためにも、留学生の現状を知り、必要な支援が何かを検討する必要がある。非漢字圏の留学生にとって難解な介護や医学用語の理解は容易ではない。また入学を機会に慣れない地域への転居、アルバイト先の変更など多くの困難を抱えながら学業と両立している。

特に2020年に1月上旬、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が世界的に大流行し、日本でも緊急事態宣言が繰り返され、入学とともにオンラインの授業となり、多くのストレスを抱えながら学業を継続していくことになった。そのようなストレスフルな状況の中、不適応に至らないための方策が必要であると考えた。レジリエンスを獲得できれば、たと

\*大阪健康福祉短期大学

連絡先：河野和美

〒590-0117 堺市南区高倉台1丁2-1

大阪健康福祉短期大学 介護福祉学科

E-mail:k.kouno@kenko-fukushi.ac.jp

\*\*大阪健康福祉短期大学

え落ち込んでも何度でも立ち直り、結果として精神的に健康な状態を維持し良好な生活を送ることができる<sup>1)</sup>といわれている。そこで留学生自身のレジリエンスの現状を把握し、留学生自身がもっている内面的な素質、留学生を取り巻く環境がレジリエンスを引き出す、あるいは高める事ができるのか検討し、支援のあり方を考えたい。

レジリエンスとは、発達精神病理学の研究から始まった概念であり、深刻で特殊な出来事に起因する精神疾患の防御因子及び回復促進因子として検討されてきた。その後、心理学、教育学、人間科学、精神福祉分野と様々な分野で研究が広まり 2000 年代には各分野で活発に行われるようになってきた。しかし研究者間で焦点の当て方に相違がみられ、定義の曖昧さも指摘されている。レジリエンスの研究にパーソナリティ資源としてエゴ・レジリエンスの研究がある<sup>2)</sup>。エゴ・レジリエンスとレジリエンスには 2 つの相違点があるとされている。一つはエゴ・レジリエンスがパーソナリティ特性であるのに対し、レジリエンスは発達上のプロセスである点である。もう一つはエゴ・レジリエンスが逆境にさらされるなどのリスクを前提にしないのに対し、レジリエンスではこれを前提とする点である。また心理的ストレスとエゴ・レジリエンスの関連で、エゴ・レジリエンスの高い人は、ストレス負荷に弾力的な反応パターンを示したのに対し、エゴ・レジリエンスが低い人は、ストレスを長期化、慢性化するパターンを示し、ストレスに脆弱である傾向を示すと言われている<sup>3)</sup>。

そこで本研究では、エゴ・レジリエンスの側面から、留学生のパーソナリティ特性を知り、精神的健康な状態を明らかにし、不適応に至らないための方策としての有効性を検討したい。

## II. 目的

留学生のエゴ・レジリエンスの状況を明らかにし、母国との生活習慣の相違、経済的困難を抱える環境などストレスフルな状況の中、精神的健康を維持するためにレジリエンスを強化する教育的支援・生活支援のあり方の示唆を得ることを目的とする。

## III. 用語の定義

### 1) エゴ・レジリエンス

本研究では、畑・小野寺<sup>4)</sup>らが用いた定義を使用し、「日常的な内外のストレスに対して柔軟に自我を調整し、状況にうまく対処し適応できるとされるパーソナリティ特性」とする。

### 2) レジリエンス

本研究には、大沼ら<sup>5)</sup>が米国心理学会をもとに使用した定義「レジリエンスとは、逆境、トラウマ、悲惨的な状況、脅威、あるいは家族や人間関係の問題、深刻な健康上の問題、職業や経済的ストレス等、重大なストレスの原因に直面したとき、うまく適応していく過程」とする。

レジリエンスの焦点の当て方は、ネガティブな状況が前提にあることとされているが、研究者によって異なる。大久保らは<sup>6)</sup>レジリエンスの概念とその捉え方を整理した結果、適応の過程、個人が持っている能力や結果に焦点をあて定義されている論文もあるとされている。本研究では、大沼ら<sup>5)</sup>の研究「性格などの特性ではなく、人々が保持している行動や思考、行為に含まれ、誰でも学習することが可能であり、また発展させることができるものである」を意味する適応の過程であるレジリエンスに焦点をあてた。

### 3) ソーシャルサポート

本研究では、大学生用のソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の先行研究、片受ら<sup>7)</sup>の用いたソーシャルサポートの定義と (1) 評価的サポート (2) 情報・道具的サポート (3) 情緒・所属的サポートを参考にした。

ソーシャルサポートとは、「特定の個人が、特定の時点で、彼／彼女と関係を有している他者から得ている、有形／無形の諸種の援助」という南らの<sup>8)</sup>定義を用いる。

#### (1) 情緒・所属的サポート

一緒に遊びに出かけてくれる、気分転換に付き合ってくれたり遊びに連れて行ってくれる、一緒にいて楽しい時間を過ごしてくれる、あなたの個人的な

話を聞いてくれる、あなたの気持ちを落ち着かせてくれる、あなたの悩みや愚痴を聞いてくれるなど周りに人に話しを聞いてもらったり共感してもらうことを意味する。

### (2) 情報・道具的サポート

問題解決方法についてアドバイスをくれる、どうしたらよいかを助言してくれる、わからない事があるときに、教えてくれる、新しいことがあるときに教えてくれる、決心がつかないときにアドバイスをしてくれる、など問題を解決するために情報や物理的な支援をもらうことを意味する。

### (3) 評価的サポート

あなたの成果に感謝や期待をしてくれる、ねぎらってくれる、努力や心がけを評価してくれる、他者の前であなたを評価してくれる、よいところを褒めてくれるという行動や考えに対する客観的な評価を意味する。

## III 研究

### 1. 研究デザイン

本研究は、半構造化面接を実施し、カテゴリーを抽出し、理論化を行うという質的研究である。

対象の留学生が9名と少なく、データ数が量的研究を行う上で少ないことと、対象留学生の背景因子—環境因子（家族への送金の必要性の有無、家長制度の有無）や、個人因子（宗教—カトリックとヒンズー教）による価値観の違い、学歴（4年制大学卒と高卒）、専門職としての経験（看護師、保健師、助産師としての経験）の有無の違い—の相違が大きいため、対象者の経験や生活世界を理解し、データ化する質的研究が適切と考えた。

### 2. 研究対象

2020年度入学のA短期大学の留学生9名を対象とした。留学生の基本属性は表1に示す。

	フィリピン留学生	ネパール留学生
人数	4名	5名
年齢	26～34歳	20～27歳
介護経験	高齢者施設での介護のアルバイト経験あり	介護のアルバイト経験なし
日本語学校	1年修了	1年～6ヶ月修了
母国での資格	2名 看護師 1名 助産師 1名 保健師	特に無し

フィリピン留学生4名(男性2名、女性2名)、ネパール留学生5名(男性2名、女性3名)であった。フィリピン留学生は全員日本語学校に通いながら高齢者施設で介護のアルバイトを経験していた。ネパール留学生は、全員介護のアルバイト経験はなく、コンビニやピッキングのアルバイト経験であった。

## 3. データ収集

### 1) エゴ・レジリエンスの測定

信頼性と妥当性が証明されている ER89 日本語版<sup>9)</sup>と英語版を併用し、自記式質問紙にて測定した。

### 2) データ分析方法

分析は、Modified Grounded Theory Approach（以下、M-GTAと表記）を参考にした。留学生を男女別の2つのフォーカスグループに分け、半構造化面接を行い、研究対象者の承諾を得て、ボイスレコーダーに録音し、研究者がその内容を逐語録に起こし、分

析データとした。分析は、M-GTA の経験のある研究者を含め共同で行うことによって、トライアングレーションによる客観性の確保を心がけた。手順は、文章を各セグメントごとに区切り、1 つのセグメントを1つの生データとした。その後、生データ毎に、内容、サブカテゴリー、カテゴリーを作成した。カテゴリーが類似するものを集めて、コアカテゴリーを作成し、最後に、カテゴリー間の関係性を、カテゴリー関係図として示した。

#### IV.倫理的配慮

対象者への協力依頼は、英語と日本語の両方の以下の事項の説明を書面と口頭にて説明した。対象者には、同意できる場合同意書に署名を依頼した。

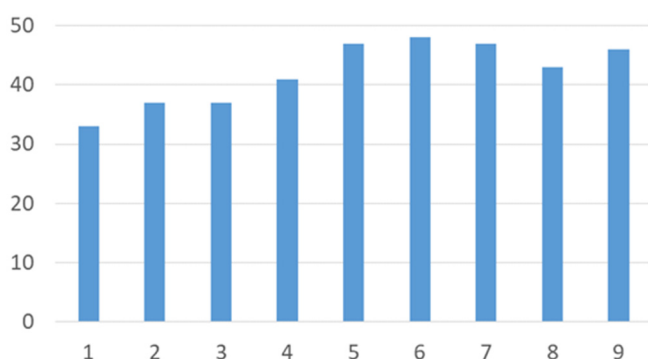
1. 研究協力は自由意志であり、同意した後でも撤回が可能であること
2. 研究協力の同意・拒否・撤回によって不利益が生じないこと
3. データは個人が特定されないようカテゴリー化し、厳重に管理し研究後は破棄すること

#### V結果

##### 1. エゴ・レジリエンス

エゴ・レジリエンスの点数を表 2 に示す。ER89 尺度では、0～10 点を「極めて低い」、11～12 点を「かなり低い」、23～34 点を「どちらともいえない」、35～46 点を「かなり高め」、47～56 点を「極めて高め」としている。留学生の得点結果を表 2 に示す。1 名が 33 点で「どちらともいえない」であるが、後の 8 名は「かなり高め」、「極めて高い」であった。

表2 エゴ・レジリエンス得点



#### 2. インタビューからの分析

セグメントは全部で 152 セグメントであった (【コアカテゴリー、《》カテゴリー、〈〉サブカテゴリーとして表す)。その中から、コアカテゴリーとして、【自己効力感の自覚】(16 セグメント)、【自己統制力】(11 セグメント)、【ソーシャルサポートの受領】(52 セグメント)、【ソーシャルサポートの不足】(45 セグメント)、【ソーシャルサポートの要請】(28 セグメント) が、抽出された。

##### 1) 自己効力感の自覚

【自己効力感の自覚】のカテゴリーとセグメントを表 3 に示す。

留学生たちは、「自分で頑張るしかない」、「覚えることには自信がある」等の〈自分の頑張りに対する自信〉や、現在の集団生活について「いっぱいの方がいい」、「一緒に住んでると、心配しないで私たちいるからって話する」等の〈経験からの集団生活への自信〉を持っていた。これらを、《自分自身に対する自信》とした。また、「(国家試験の模擬試験の時)あと 1 分あったら絶対合格できる」、「まだ勉強する時間あるから、頑張る」等の〈国家試験合格への展望〉を持っていた。これを、《卒業・国家試験合格への自信》とし、コアカテゴリーを【自己効力感の自覚】とした。

##### 2) 自己統制力

【自己統制力】のカテゴリーとセグメントを表 4 に示す。

留学生たちは、「ストレスあるけど、自分でしないと、するしかない」、「私のことは私、誰もいない。ここは日本やから、分かてるから先生」等の〈自己コントロールによる学習意欲の維持〉や、学業とアルバイトの両立については、「もう慣れたから、毎日やってるから」、「しんどいときは何もしない」等、自分で生活をコントロールしながら〈生活リズムの調整による学習意欲の維持〉を図っていた。これらのコアカテゴリーを【自己統制力】とした。

カテゴリー	サブカテゴリー	生データ
《自分自身に対する自信》	《自分の頑張りに対する自信》	<ul style="list-style-type: none"> <li>・分からない言葉はネパール語の翻訳しないとできないし、自分で頑張るしかない</li> <li>・試験の時にこうやって、こんな感じで出るよって言ってくれたら絶対大丈夫だけど。覚える事には自信がある。</li> </ul>
	《経験からの集団生活への自信》	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国では一人ずつ住んでないから。いっぱいいた方がいい。子どもの時、22人でご飯食べてた。</li> <li>・一緒に住んでる人と、何か心配あったら、どうするの？って聞いて。心配しないで私たちいるからって話してる</li> </ul>
《卒業・国家試験合格への自信》	《卒業・国家試験合格への展望》	<ul style="list-style-type: none"> <li>・（国家試験の模擬試験の時）最後のページ全然やってない。あと1分あったら絶対合格できる。最後までいけたら絶対合格できる</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・国家試験まで、まだ勉強する時間あるから、それは頑張る。目の前の試験、国家試験以外ないから。</li> </ul>

カテゴリー	サブカテゴリー	生データ
《自己統制力の発揮》	《自己コントロールによる学習意欲の維持》	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ストレスあった時は私なんでストレスある？思うから、いっぱい考えない。考えない。ストレスあるけど、自分でしないと、するしかないから</li> <li>・私のことは私、誰もいない。誰かおってもしないから、ここは日本やから、分かてるから先生。</li> <li>・（しんどいのは）家でも一番上の子どもやからあまり出さない。今も（同居者は）私の妹みたいだから、言わない。何か他の人だったら手伝って言ったら、手伝うけど、自分はみんな笑ってるから大丈夫矢みたいいな先生</li> </ul>
	《生活リズムの調整による学習意欲の維持》	<ul style="list-style-type: none"> <li>・（学業とアルバイトの両立は）もう慣れたから。朝起きてここ（大学）に来て、6時くらいからバイトに行って、バイト終わってから家に帰ってご飯作って。毎日続けてるから</li> <li>・体がしんどいときは、何にもしないでゴロゴロしてる。何にもしないねん。</li> </ul>

### 3) ソーシャルサポートの受領

【ソーシャルサポートの受容】の категорияとセグメントを表5に示す。

留学生たちは、「家族に1日1回は電話して、元気してるとかシェアしてる」、「(母国の)歌を歌ったり、踊ったりしてると(ストレスが)楽になる」、「しんどいときは(母国の)動画とか映画見る」等(家族・同郷者による安心感)を得ていた。また、「(アルバイトでは)学校長い時間あるときは、ゆっくりしていいからって、優しい」、「バイトの時はいつも楽しいから、毎日バイト行きたい」等、(アルバイト施設のサポートによる安心感)を得ていた。他にも、「(助けてくれる)先生がいることを言うと家族も安心。家族が安心したら、自分も安心」と、(教員のサポートに対する家族の安心感による自己安定)を図っていた。これらを《情緒・所属的サポートの受領》とした。

学習やアルバイト(高齢者施設での介護職のアルバイト)については、「日本語分かるようになって勉強するようになった」という(日本語の話し言葉の理解による知識の深まり)があった。そして、「バイトしながら勉強してる」、「学校で習って、バイトでやって、分かる」など、(アルバイト経験による知識の深まり)を体験していた。また、「バイトでも、暇なときは勉強してねって言ってくれるし、分からないことを教えてくれる」、「授業で難しかったらバイト先に行って聞く。全部教えてくれる。国家試験の問題もくれる」など(アルバイト施設からの学習支援による知識の深まり)も経験していた。「1年生の時、全然わからなかったら、Aさん(日本人)がここ覚えてらいいよって言ってくれた。助けがあってできるようになった」、「AさんとかBさんとか助けてくれないと合格しなかった」など、(日本人クラスメートによる学習支援)も受けていた。教員からは、「先生たちに助けてもらってる。勉強も、生活の足りないものとか」、「困ってた時一番助けてくれたのは先生。夜も昼も」など、(教員の学習面・生活面の支援に対する感謝)を感じていた。これらを《情報・道具的サポートの受領》とし、《情緒・所属的サポートの受領》と合わせて、コアカテゴリーを【ソ-

シャルサポートの受領】とした。

### 4) ソーシャルサポートの不足

【ソーシャルサポートの不足】の категорияとセグメントを表6に示す。

ネパールの留学生たちは、「(前に住んでいたN市)は、ネパールの人がたくさんいて聞けたけど、ここではない」と不安がっていた。またフィリピン留学生では、「家族は(携帯電話の)電波が届かないところにいるから、電話できない」など、お互いの環境の中で(家族・同郷者がいない環境への不安)を感じていた。また、ストレス状態の時には、「一日出かけない」、「ストレスあるときは、食べない」など、(ネガティブな対処法)でやり過ごしていた。「ずっと家にいたら何か考えたりする」。「(大学もバイトも)休みの時、いつもしんどい」と、(孤独感からくる不安)等の《情緒・所属的サポートの不足》を感じていた。

また、「生活はどうにかなってるけど、(貯金がないから)やりたいことができない」と(経済面でストレス)を感じている留学生もいた。アルバイトについては、「バランスが大変だった。勉強に時間が少なかった」、「家に帰ったら(疲れて)ちゃんと勉強できないから外でやる」など、(アルバイトと修学の両立の困難感)を感じていた。また卒業・国家試験については、「国家試験の勉強がとっても大変」、「卒業難しいかなと思っている」、「卒業と国家試験が一番心配」、「今ストレスなのは卒業だけ」など、不安が大きかった。そして、日本語修得に関しては、「今は(日本語を大変と思うのは)そんなないけど、介護の言葉、意味、漢字も難しい。しゃべることと全然違うから」、「日本語話すはできるけど、漢字と介護のことばが一番難しい」、「日本語は(同じことを)違う言葉で言うから難しい(腕、手、上肢など科目によって違う)」など、(日本語修得に対する困難感)など、《情報・道具的サポートの不足》を感じていた。

《情緒・所属的サポートの不足》と《情報・道具的サポートの不足》を合わせて、コアカテゴリーを【ソーシャルサポートの不足】とした。

表5 ソーシャルサポートの受領

カテゴリー	サブカテゴリー	生データ	
<<情緒・所属的サポートの受領>>	<家族・同郷者による安心感>	・1日1回は家族に電話する。電話して私は元気にしてるとか、家族も元気にしてるとかシェアしてる ・家族に電話してこんな感じやったよって言う。友達のところに行って、ストレスあったこと言って、これやったらどうなるかな？、どうしたらいいか？って相談する ・家族が応援してくれてるから、自分もうれしいって(思う) ・(母国の音楽)歌ったり踊ったりすると、(ストレスが)楽になる。子どもの時からやってるから、楽しいときもやる ・しんどいときは携帯で(母国の)動画とか映画見る	
	<アルバイト施設のサポートによる安心感>	・(アルバイト先の人は)言うのも言うけど優しい。バイトのこと全然問題ない。学校長い時間ある時は、ゆっくりしていいからって、みんな優しいから大丈夫 ・バイトの時はいつも楽しいからストレスあまり感じない。いつも毎日バイト行きたい ・バイト行ったら、みんな話したらちょっとうれしい	
	<教員のサポートに対する家族の安心感による自己安定>	・(色々助けてくれる)そんな先生がいることを、家族に言うとか家族も安心した。家族が安心したら、自分も安心。	
	<<情報・道具的サポートの受領>>	<日本語の話し言葉の理解による知識の深まり>	・授業で、アルバイトでコミュニケーションとってるから、(日本語)わかるようになりました。前は、全然日本語分からなかった。日本語、分かるようになって、勉強するようになった
		<アルバイト経験による知識の深まり>	・バイトしながら、練習しながら(勉強してる)。例えば、脳梗塞はこんなんですね。それで助かる、ほんとに。 ・アルバイト始めた時は、めっちゃ大変だったけど、今は慣れた。学校で習って、バイトでやって、分かる
		<アルバイト施設からの学習支援による知識の深まり>	・30分くらい、毎日じゃないけど、職員さんが、今日は何かあった？と聞いて、学校の課題持ってきていいよって言ってくれる ・バイトでも、暇なときは勉強してねって言ってくれるし、分からないことを教えてくれる人もおるし。 ・(授業で)難しかったらバイト先に行って聞く。バイト先で、国家試験125点とった人がいるから全部教えてくれる。国家試験の問題もくれる
		<日本人クラスメートによる学習支援>	・1年生の時全然わからなかったら、Aさんがまとめてここ全部覚えていいよって言ってくれて。感想文書くのも助けてもらった。助けがあっただけよかった ・日本人優しい。AさんとかBさんとか助けてくれないと合格しなかった
		<<教員の学習面・生活面の支援に対する感謝>>	・ストレスある時は、先生たちに助けてもらってる。勉強も、生活の足りないものとか ・どうしたらいいの分からない時、先生がアイデアくれたり、こうしてくださいってしてくれたから助かった。 ・困ってた時一番助けてくれたのは先生。夜も昼も。

表6 ソーシャルサポートの不足

カテゴリー	サブカテゴリー	生データ
≪情緒・所属的サポートの不足≫	〈家族・同郷者がいない環境への不安〉	・N市(本学入学前に住んでいた)にいる時は、ネパールの人がたくさんいたけど、大阪に来たらそういう人たちがいない。聞くチャンスがN市では多いけど、ここではない。 ・自分の家族は(携帯電話)電波の届かないところにいるから、電話できない。手紙も書かないから・・・
	〈ストレス時のネガティブな対処法〉	・ストレスあった時は、一日出かけない。ずっと家にいる。 ・ストレスある時、私たちは食べない。食べたくない。寝れない。
	〈孤独感からくる不安〉	・ずっと家にいたら何か考えたりする。 ・(大学もバイトも)休みの時、あのいつもしんどい。
≪情報・道具的サポートの不足≫	〈経済面でのストレス〉	・生活は、アルバイトでお金もらってるから問題ないけど、それ以外にやりたいことが(貯金がないから)できない。
	〈アルバイトと修学の両立の困難感〉	・(勉強とアルバイトの)バランスが大変だった。勉強の方もしたいけど、アルバイトもあるから、勉強に時間少なかった。 ・みんな分かると思う。家に帰ったら、(疲れてて)ちゃんと勉強できないから外でやる
	〈卒業・国家試験合格への困難感〉	・国家試験のこと。国家試験の勉強がとっても大変です。とっても大変。 ・ここ(本学)では卒業難しいかなと思ってる。全部合格できてないから。別の大学の友達は再試験で合格できるようにしてくれてるので、全部合格してるから大丈夫と。 ・卒業と国家試験が一番心配。どうしたら勉強分かるのか、先生に相談してる。 ・今ストレスなのは、(大学の)卒業だけ。卒業して、就職して、国から奥さん呼びたい。
	〈日本語修得に対する困難感〉	・(一年次の前半は)時間がなかったし、日本語分からないし、あまり勉強する気になえなかった。 ・最初、課題が文章でいっぱい来た時はショックだった。どの本を見ていいのかも分からなかった。ほとんど何も出さなかった。 ・今は(日本語を大変と思うのは)そんなないけど、でもめっちゃ難しいのは、介護の言葉、意味、漢字も難しいし、しゃべることと介護のこと全然違うから。 ・日本語話すはできるけど、漢字と介護のことばが一番難しい。 ・日本語は、(同じことを)違う言葉で言うから難しい。人(先生)によって違うから(例えば、英語だったらarmだけど、日本語は腕、手、上肢など科目によっても違う)。分かっている言葉も違うから。言ったら教えてくれるから、ああそうなんだと思ってる。 ・試験全部漢字だったから時間かかる先生。時間かかった。それあったから不合格になった。

## 5) ソーシャルサポートの要請

【ソーシャルサポートの要請】の категорияとセグメントを表7に示す。

「いつもCさん(同郷の留学生)学校に行ってるから、いつも聞いて教えてもらう。だから一緒に間違えね」、「最初のころ(1年生の時)、自分の日本語があつてるかどうか、すぐ聞ける人が欲しかった。前に住んでたところでは、(母国語もわかる人がいたので)できた」など〈同郷者のサポートの必要性〉を訴えていた。これを「情緒・所属的サポートの要請」とした。

また、学習面では「どうやってやるか分からないから助けてほしい」、「易しい言葉で言ってくれたら、分かったからできた」など、〈学習方法へのサポートの要望〉があった。卒業・国家試験に対しては、「卒業したい。みんな一緒に卒業したい」、「頭の中でずっと考えてる。どうやったら受かるかな。バイト行っても仕事してても」、「絶対卒業したい、しないと将来が変わる」など、〈卒業・国家試験合格への渴求〉を抱えていた。日本人学生には、「分かっているって聞いてくれたら、本当にありがたい」、「年上の日本人の人(訓練生)がいて助けてくれたからできたけど、今の1年生にはいないから大変そう」など、〈日本人学生からの支援への要望〉を持っていた。そして、日本語に関しては、「ほんとは漢字覚えたら分かりやすいかなと思う(「気管内」、「期間内」、「期間無い」)。覚えたいけど、専門用語の意味、やっばり難しい」、「日本語がもっと分かれば、もっと出来ると思う」など、〈日本語理解の深まりへの要望〉があった。これらを、コアカテゴリー【情報・道具的サポートの要請】とした。

また、「(お父さん)はちゃんとしてって。頑張ってるけど、できる?」、「一生懸命やってるけど、同じ留学生でも違う。頑張ってることを分かってほしい」など、親や教師への「評価的サポート要請」を訴えていた。これらを、コアカテゴリー【ソーシャルサポートの要請】とした。

これらのカテゴリーの関係性を図1に示した。

## VII 考察

### 1. レジリエンスの現状

個人の資質的とされるエゴ・レジリエンス得点が、フィリピン留学生、ネパール留学生ともども高得点でかなり高いのは、一つには、彼らの資質によるものと考えられる。彼らは日本に留学し、そこで大学に進学し、資格を取って就業しようという意思で留学して来た。それは、予想される困難に立ち向かい、成果を出せるという展望を抱けるという自己効力感や、困難な状況があつたとしても“やれる”という自信をもてる資質があつたからと推測される。

ネパールでの中等教育の就学率は、51.7%(外務省ホームページ)と決して高くなく、地域差が大きいと言われている。その中で、中等教育を受け、日本への留学を決意したという状況が既にエゴ・レジリエンスの高さを現わしているものと思われる。またER85の質問項目の中に「私は今まで食べたことがない食べ物を試すことが好きだ」というものがあるが、現在A短期大学に入学しているネパール留学生たちは、5人ともヒンズー教で食べ物に制限があり、この項目の得点が低かつたことが推測され、現状の得点よりもさらに高いエゴ・レジリエンスを持っていると思われる。

またフィリピンでは、大学進学率が30%という状況である。そのフィリピンで、留学生の4人は、看護師、助産師、保健師の資格を得るため4年制大学を修了し、フィリピンでその資格で従業もしている。しかし、フィリピンでの状況には満足できず一裕福層でなければ就職に有利な一流校に通えないという状況がある格差社会である一に、より良い生活を求めて日本への留学を決意したということは、やはりネパール留学生と同様、エゴ・レジリエンスレジリエンスの高さの表れではないかと考えられる。

個人の資質とされるエゴ・レジリエンスがレジリエンスとして発揮されるには、自己効力感が必要とされている。これは、留学生たちが母国での様々な環境の中でも、高等教育を受けてきたという達成感や受けられた環境等によって培われてきたものであると考える。「覚えることには自信がある」、「最後まで

表7 ソーシャルサポートの要請		
カテゴリー	サブカテゴリー	生データ
《情緒・所属的サポートの要請》	《同郷者のサポートの必要性》	・いつもCさん学校に行ってるから、いつも聞いて教えてもらおう。だからいつも3人答えっしょ。だから、一緒に間違えね。
		・最初の頃、自分の日本語あってるかどうか、すぐ聞ける人がそばに欲しかった。前に住んでたところでは、それができたけどこっちはできなかったから不安だった。
《情報・道具的サポートの要請》	《学習方法へのサポートの要望》	・ほんとにこれやらないといけないよと言った時は、絶対やるから。自分でこれやらないと自分困るんやと、自分で思い出して、絶対やるけれど、どうやってやるか分からないから助けてほしい。
		・(喀痰吸引の実技テストの時や課題提出の時)何をしたらいいのかよく分からなかったから、しなかった。でも、言われたらできる。易しい言葉で言ってくれたら、分ったからできた。
	《卒業・国家試験合格への渴求》	・バイト先から、いっぱい模試もらってる。卒業したい先生、みんな一緒に卒業したい。国家試験も合格したい。
		・頭の中でずっと考えてる。どうしようかな?どうやったらいいかな?今はD先生の試験、合格しないといけないから、いつも心ななでストレス。どうやったら受かるかな?と思ってる。バイト行っても仕事してても、そのこと頭に入るから、思ってる。
《日本人学生からの支援への要望》	《日本人学生からの支援への要望》	・私たち分からないかなって思って聞いてくれて。分かるって聞いてくれたら、本当にありがたい。そんな人がいたから、私も課題出せたから。
		・私たちは、年上の日本人の人がいて助けてくれたからできたけど、今の1年生にはいないから大変そう。かわいそう先生。
	《日本語理解深まりへの要望》	・日本語の意味多いからね、先生。同じ意味いっぱいあるから。ほとんどは先生、漢字覚えたら分かりやすいかなと思う(この間の「気管内」と「期間内」、「期間無い」。覚えたいけど、専門用語の意味、やっぱり難しい。
《評価的サポートの要請》	《親の期待に応えることへの不安感》	・漢字そのもの、「終末期」って分からなかったから、聞きたくないって思ってた。授業で、困難だったら聞きたいって思った。日本人は漢字の意味で分かるけど、私体には分からない。エンドステージも分からなかった。ターミナルケアだったら分かったけど。介護の専門用語は難しい。易しい言葉で言ってくれたら分かる
		・単位はとれてるから、日本語は分かるようになったけど。日本語がもっと分かれば、もっと出来ると思う。
《評価的サポートの要請》	《留学生内での学習習得レベルの相違による心理的圧迫感》	・(お父さんは)ちゃんとしてって。もうすぐ31歳なのにどうするの?だから、日本に来て自立?頑張ってるけど、できる?(お父さんの評価、不安)

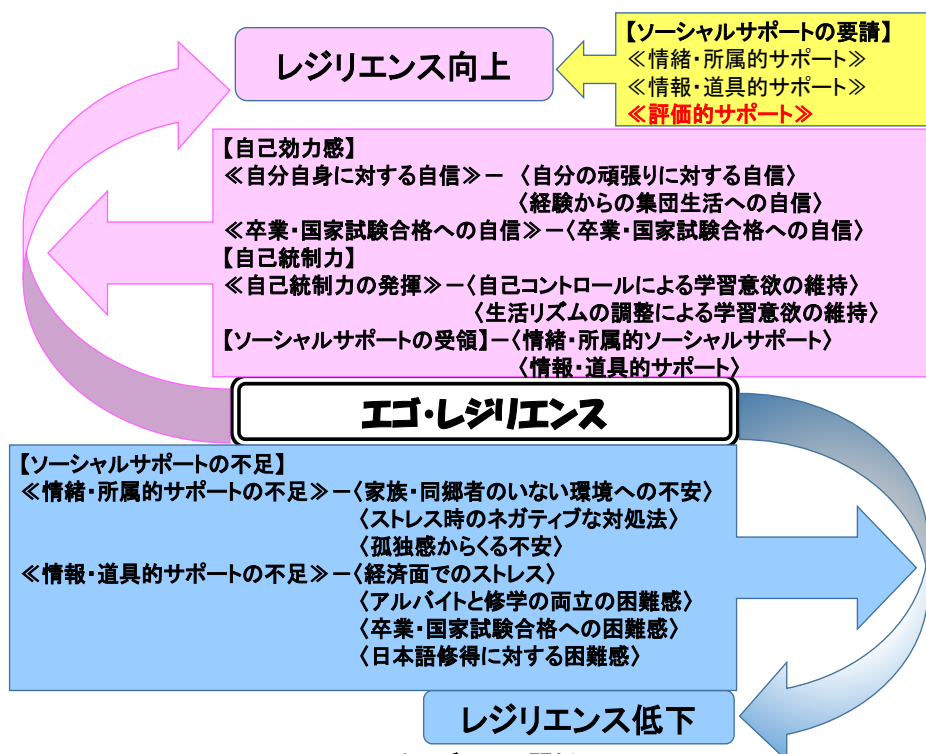


図1 カテゴリーの関係図

でいけたら絶対合格する」などの言葉から、各々の自己効力感に今までの成功体験が大きく影響していると思われる。この留学生自身の【自己効力感の自覚】を活用した支援が必要と思われる。

## 2. レジリエンスを高める支援

### 1) 情緒・所属的サポートについて

留学生全員が、A 短期大学に入学する前にすでにある程度しながら日本語学校に通学しており、その中で生活の仕方やストレスの解消法などを経験し、生活と学業を両立させる方法を学んできたことにより、自己統制力を得てきたと推測される。しかし、引っ越しによる環境の変化や、学習内容の高度化によって、大きなストレスがかかっていたことも推測される。特にネパール留学生は、初めて介護のアルバイト経験であることや、サポートしてくれていた同郷の大人の人たちと離れたことなどを考慮し、十分に気持ちを話せるような場の設定などきめ細かな対応が必要とされる。フィリピン留学生も、以前から介護のアルバイトを経験し、独自でアパートで生活していたとしても大きな環境の変化であることに変わりはない。そして両留学生とも日本語の修得が不十分であることを考えると、入学早期に母国語で自分の思いを出せるような機会を持つことが求められていると思われる。2020 年度の入学時のオリエンテーション時に、堺市国際ボランティア制度を利用してネパール語の通訳の方に来ていただき、ネパール留学生の疑問や不安について対応したが、1 回限りの取り組みであった。フィリピン留学生も公用語や教育は英語でなされているが、普段は友人とフィリピン語とされているタガログ語で話していることから、タガログ語で話せる場があればより自分の気持ちを出せるのではないかと思われる。こういう母国語で話せる場を定期的に設定する必要があると考える。野崎らは児童についての研究<sup>10)</sup>ではあるが、問題を解決し乗り越えるプロセスの中でレジリエンスを認識することが重要であり、そのためには「母国語を安心して使用できるような制度や環境の創出が必要である」としている。また、東原らの研究<sup>11)</sup>では、友人からの情緒的ソーシャルサポートが、自己効力感に影響を与えるということが明らかにされ

ていることから、今後はゼミのグループの編成も 1, 2 年生混合で同郷者の友人の情緒的サポートが得られるような編成を検討する必要もあるかと考える。

### 3. 情報・道具的サポートについて

#### 1) 生活面へのサポート

生活が安定しないと、学習に気持ちが向かないという状況があるため、1 年時前半は、アルバイトによる安定した収入を得て生活面を安定させることが必要とされている。2020 年度、2021 年度もコロナ禍の影響により、アルバイト施設は決まってもアルバイト開始が緊急事態宣言のため遅くなり、生活の安定にかなりの期間を要した。このような場合に対応できる基金のような制度を大学として設ける必要もあるのではないかとと思われる。2020 年度は、大学の留学生支援の体制の不十分さから、特定の教員に学習面でも生活面でも支援の負担が大きかった事実は否めない。2021 年度は、事務職員の中に、留学生の生活支援担当者を専任として位置づけ、教員と連携し対応に当たっているため、より早く個々に応じた支援ができるように改善されつつある。

#### 2) 日本語獲得へのサポート

言語学者の吉岡乾氏によると、世界には 7000 超の言語があり、その中で約半数が文字を持っているが、日本語のように漢字、ひらがな、カタカナと 3 つの文字種を併用して表記するのは、「おそらく唯一」であるという。確かに留学生にワードを使用して日本語を入力させようとした時、「どの漢字を選んでいいかわからないから書けない」と言われたことがある。インタビューの中にもあるように、「気管内、期間内、期間無い」の区別がつきにくい。同様に「最近、細菌」も混同することがあった。

インタビューより、留学生たちは、「日本語が分からないと勉強する気がしなかった」、「先生が説明してくれてもわからなかった」と、入学当初は「話し言葉」としての日本語の獲得に困難を感じていた。私たちは、言葉を覚え理解するまでには、まず「話し言葉」から学んでいく。留学生が、「間違ってもいい」から「日本語を話す」環境を作ることが必要と思われる。授業やゼミ、課外活動の中で日本人と日

本語で話す機会を工夫し、自分の日本語が伝わったという経験を得ていくことが大切と考える。

1 年次後期になると、介護実習が始まり、専門教科も増えていくことから、書き言葉としての日本語の獲得が求められる。日本語を科目「福祉のための日本語」として 1 年次からカリキュラム組み込んでいるが、「介護や医学の専門用語—特に漢字は、日本人にとっても難しいものも多く、日本人学生と一緒に、専門用語の漢字や意味を学んでいくことで、お互いの文化の違いなどを認識しながら、介護についての理解を深めることにつながっていくのではないかと考える。

留学生の日本語科目の到達度と他の専門科目の到達度が、見事なほどリンクしている。柳らの中国人留学生を対象にした研究<sup>12)</sup>でも、「日本語能力を高める支援を行うことで、学習面での課題の達成や学業成績の向上につながり、友人関係と目標達成の両方において自己効力感を高めることが示唆された」とあるように、日本語の「話す」、「読む」、「書く」の獲得が、学習支援においても大変重要だと考える。

### 3) 学習面へのサポート

学習面における日本語獲得へのサポートの重要性は、先に述べた。

ここでは、アルバイト施設との連携について述べる。留学生たちは、全員介護施設でアルバイトをしており、アルバイトでの経験や職員さんの支援が授業の理解を深めることにつながっていた。このことから、アルバイト施設との連携のあり方で、より一層効果的な学習面でのサポートができるのではないかとと思われる。今大学で何を学んでいるか、またこの学生の課題は何かなどを、アルバイト施設で共有する中で、学習面や技術面でも学びを深め、アルバイトとしてもより良い介護の提供ができるようになるのではないかとと思われる。

また一人一人の学生の特徴を把握し、学習方法をアドバイスすることにより、留学生が一番不安を感じている卒業・国家試験合格への展望を持てるようになるのではないかと考える。

### 4. 評価的サポートについて

評価的サポートは、メンタル面でのストレスを軽減するといわれている。留学生は、“自分の頑張り”に対して『目上の人』である親や教員からの評価を求めている。評価されることで、自分に自信が持て自己効力感の向上につながり、自己の持つエゴ・レジリエンスを発揮し、レジリエンスを向上させ得ると推測される。教職員は、留学生の頑張りや成長を常に評価し、「頑張っていることを分かっているよ」という意思表示を忘れないで、留学生たちに伝えてことが大切だと思われる。

## VIII 結論

1. 留学生のエゴ・レジリエンスを測定し、高いことが明らかになった。
2. 日本語修得の到達度が、学習到達度に大きく影響を及ぼしている。その為、入学の早い時期に日本語の修得に向けたサポートが必要である。
3. 留学生のレジリエンスを高めるためには、大学として組織化された情緒・所属的サポート、情報・道具的サポート、評価的サポートなどのソーシャルサポートの構築が必要である。

## IX 研究の限界と課題

本研究は、フィリピン留学生 4 名とネパール留学生 5 名を対象とした研究で対象者が少なく、研究結果は限定的である。また、ネパールの留学生は、毎日 1 回は必ず電話してお互いの状況を確認するなど家族からのサポートに大きく影響を受けていたが、フィリピン留学生はたまにしか家族と連絡を取らないという状況があった。このように母国の違いにより背景因子が違い、必要なサポートも違ってくことから、介護福祉関係で留学生が多いベトナムやインドネシアなどの留学生も、共通点はあるものの背景因子の違いにより、レジリエンスを高めるサポートには違いがあると考えられる。今後、他国の留学生についてもその特性や背景因子の違いを明らかにしながら、必要なサポートについて研究を進めていく必要があると考える。

A 短期大学では、日本人学生と留学生が同じクラスで授業を受けているが、そのことをどのように感

じているのか、日本人学生にとって留学生と同じクラスで学ぶことがプラスになるような日本人学生に対する学習支援も課題として考えていく必要がある。

## 謝辞

本研究のためにインタビューに応じていただいた留学生の皆さんに、厚く感謝いたします。

## 参考文献／引用文献／脚注

- 1) 杉本千里、笠原聡子、岡 耕平、(2018)「二次元レジリエンス要因尺度を用いた看護学生のレジリエンス特性の学年による違い」、日本看護学会誌 J.Jpn.Acad.Nurs.Sci<Vol.38<pp.18-26
- 2) 畑潮、小野寺敦子 (2014)「エゴ・レジリエンス研究の展望」、目白大学心理学研究、第 10 号、pp.71-92
- 3) 前掲論文 2)
- 4) 前掲論文 2)
- 5) 大沼 幸子 内田 裕子(2019)「精神看護学の体験型学習における学生のレジリエンス変化」、東京有明医療大学雑誌 Vol.11: 11-18
- 6) 大久保麻矢、杉本恵理子、藤田恵子、刀根洋子、(2012)「看護分野におけるレジリエンス研究の傾向分析—国内分析の動向—目白大学、健康科学研究大 5 号、pp.53-59

- 7) 片受靖、大貫尚子 (2015)「大学生用ソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」、立正大学心理学年報第 5 号、pp.37-46
- 8) 南隆男、浦光博、稲葉昭英 (1988)「ソーシャルサポート研究—単身赴任家族の心理的・社会的ストレスとの関連において—」、日本社会心理学会第 29 回大会発表論文集、pp.144-145
- 9) 畑潮、小野寺敦子 (2013)「FGo-Resiliency(ER89)日本語版作成と信頼性・妥当性」、パーソナリティ研究、第 22 巻、第 1 号、pp.37-47
- 10) 野崎章子、大塚公一郎 (2018)、「在日ブラジル人児童のレジリエンス—個人因子としての心理的特性と言語運用に関する記述的研究—」、千葉看護学雑誌、Vol.24、No.1、pp61-69
- 11) 東原義明、塚脇涼太 (2015)「大学新入生の抑うつと自己効力感に与えるソーシャルサポートの効果」、比治山大学大学院現代文化研究科附属心理学相談センター紀要、第 11 号、pp13-17
- 12) 柳佳慶、松田英子 (2011)「在日中国人流学英のストレスと異文化適応に関する研究—文化受容態度と自己効力感からの分析—」、江戸川大学紀要情報と社会、NO21、pp157-160

# Factors Underlying the Resilience of International Students Taking a Care Worker Course and Strategies to Facilitate their Resilience in Learning

Kouno Kazumi\*, Ishida Kyoko\*\*

## Abstract

At our college, international students have started learning to become certified care workers since 2020. These students have various difficulties in both learning and everyday life such as overcoming the language barrier and personal finances. Using a group interview and questionnaire, this study investigated factors that help international students remain resilient until they successfully finish the course. Participants were found to have high self-efficacy and ego-control. The emotional support of the family was an important factor in the participants' resilience. Most participants wanted information and instrumental support when it came to Japanese learning and the national examination for certified care workers. So far participants have gained no appreciative support. These results suggested that the following strategies are crucial. First, teachers should appreciate the students' efforts to learn. Second, it is important to support Japanese learning of the students in the first semester of the first year. Third, in the second year, it is necessary to help students to prepare for the national examination.

Key words: resilience, international student, livelihood support, education support, nursing care and welfare

---

\*Osaka College of Social Health and Welfare  
Contact Address : Kouno Kazumi  
〒590-0117 1-2-1 Takakuradai, Minami-ku, Sakai City, Osaka  
Osaka College of Social Health and Welfare  
Department of Care and Welfare  
E-mail : k.kouno@kenko-fukushi.ac.jp  
\*\*Osaka College of Social Health and Welfare